

現代社会と水—水紛争—

地球は水の惑星といわれている。歴史をかんがみても、栄えた文明は常に水とともにあり、人類は水とともに歩んできた。そんな身近（豊富）なはずの水ではあるが、実際は「21 世紀では水資源の争奪から戦争が起きるだろう」と懸念されているのである（排水は廃水か）。日本では水不足という言葉に馴染が無いが、世界レベルの問題であり、事実である。水はすべての人類が必要とするものであるという事実の下、水問題に深刻に取り組まねばならない。このレポートでは水紛争を社会的背景とともに考えてみたい。

私が初めて水紛争について考えたのは、ELP でボリビアの水紛争について言及したレクチャーを受講したのがきっかけだった。『湯水のように使う』ということわざがある日本では、水がない等の心配はほとんどせずに暮らしているが世界的に見ると水不足は確実に存在している。人類が使える淡水は川・湖・降雨などの表流水と呼ばれる水で、それは地球上のわずか 0.01% に過ぎない（ウォーターネットワーク）。にもかかわらず、発展や開発によって川は汚れ、消費社会はより多量の水を消費し、飲用としての水はますます少なくなっている。その結果として、2025 年には利用可能な水量のほぼ 9 割に達し、各地で水不足に陥る可能性があると言連は予測している（ウォーターネットワーク）。そして実際、その限りある水を求めて争う『水紛争』はすでに世界で起こりつつあるのだ。まず、先に挙げたボリビアの例を検証して水紛争と社会的背景（水のビジネス化）について考えたい。

ボリビアにおける水紛争とは 2000 年 1 月から 4 月にかけておきた、水道民営化に反対する大規模な抗議行動のことである。水道会社の民営化により水道料金は膨大に跳ね上がった。その結果、月額 60 ドルの最低賃金で生活する人々の水道料金が、月収の 25 パーセントにもものぼるほどの値段になったのだ。つまり、水は生物共有の財産としてではなく『ビジネス』の『商品』として扱われたということである。それに対して大規模な抗議行動が起こり、最終的には水供給会社は事業撤退を表明したが、このケースは水不足という事態の深刻性を理解せず一過性の利益を優先した結果、このような水紛争が起きたことを

示している。

以上に述べたボリビアのようなケースは単なる過去の出来事ではない。いまもこの水紛争は起こり続けているのだ。たとえば、アラル海地域、インダス川、ヨルダン川、ナイル川、チグリス・ユーフラテス川流域は 5 大水紛争地域として不安定な状況である（水のライブラリー）。国連は『（過去 50 年間で）暴力が絡む激しい紛争は 37 件しか起きていない』（国連広報局）と述べているが、私たちは 37 件 “しか” ではなく 37 件 “も” 起きているという事実を深刻に受け止める必要があるのではないだろうか。水は命であり、人々（生物）は水無くしては生きていけないのだ。そんな身近な水であるが——もしくは身近だからこそ——『水不足』は遠いもののように思えるかもしれない。しかしながら『蛇口をひねれば水が出てくる』ことは当たり前ではないのだ。水不足に対して対策を練るどころか、それを利用してビジネスにするなどあってはならないことである。水は生物共有の財産である。水との共生により世界的共生が達成されるために、自国の水資源確保に留まらず、水問題を己の問題として世界的に各々が取り組む必要がある。

参考文献

Friends of the Earth International

<http://www.foei.org/en/publications/pdfs/water_japanese.pdf>

ウォーターネットワーク <<http://www.waternetwork.org/society/index.html>>

国連広報局 <<http://www.unic.or.jp/new/pr03-019.htm>>

シネマトピックスオンライン ザ・コーポレーション

<<http://www.cinematopics.com/cinema/works/output2.php?oid=6128>>（ボリビアの記述はこれを参考とした）

名古屋市上下水道局 水のライブラリー

<<http://www.water.city.nagoya.jp/intro/library/global/content1.html>>

ミツカン 水の文化センター

<http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/mizu_18/no18_d01.html>